



馬耳東風

ゴールデンウィーク（GW）初日の土曜日の午後にこの原稿を書いている。昨日からGWの出国ラッシュが始まっているようだ。成田からは43万人、コロナ禍前の9割とのこと。ピークは出国が4月27日、入国は5月6日という。30年前に小動物診療施設を開業して以来、家族共々GWとは無縁の筆者にとっては別世界の話題だが、みなさん大いに楽しんで無事に帰ってきていただきたいものである。

さて、先日、小動物のある専門医療施設から雇用問題で困っているとの相談を受けた。

就職希望者向けに施設の見学をオープンにしているのだが、多くの見学者は来るものの、実際のエントリーには結びつかない。どこに問題があるのか見当がつかないので一緒に考えて欲しいとの依頼だった。当該施設は最新の医療体制を備え、就労規則もしっかりしており筆者自身にも核心を突く理由が思い当たらない。ふと、もしかしたら雇用側と就職希望者の間に世代ニーズのギャップがあるのでは、と考えた。そこで昨年及び今年卒業の若手獣医師に集まってもらいインタビューを実施してみた。

色々と話して行く中で「私たちの世代は怒られたら辞めます、ちゃんと教えてくれないと辞めます」という発言があった。そう言われて「え？ どういうこと？」と思ってしまった。そう思うことがすでに時代遅れということか。いわゆるZ世代といわれる彼らからのこういった発言は昭和を過ごしてきた筆者には頭ではわかっているが正直受け入れがたく、どう咀嚼したらよいか戸惑ってしまった。同世代の会員諸兄もしくは先輩方も同じ思

い、と言っていただけるとなんだか安心するのだが…
ただこれが現実。

時代の流れ、変化であり、合わせなければいけないのはわれわれ側にあると考えるべきなのであろう。

その一方で就職を決めた理由に「ちゃんと接待してもらった」という意見もありとても興味深かった。つまり、見学後に食事に誘われ、自院の特徴、目指すところ、キャリアパスの説明を受け、ぜひうちに来て欲しいと言われたのが決め手とのこと。これを接待と言うかどうかは別としてそういうことには否定的な世代と勝手に決めつけてしまっていた自分を大いに反省した。コロナ渦を経て、人とのつながりを重視するZ世代の特性が強化され、オンラインよりも対面でのコミュニケーションを求める傾向が生まれているようでなんだかホッとした。

人生百年と言われる現代だが、裏を返せばさまざまな世代が入り乱れる、多世代共生の時代ともいえる。

沈黙の世代（1928～1945年生まれ）、ベビーブーム世代（1946～1964年生まれ）、X世代（1965～1980年生まれ）、ミレニアル世代（1981～1996年生まれ）、Z世代（1997～2012年生まれ）、アルファ世代（2013年～）。

これらが共存する社会、お互いが壁を作らず柔軟な流動体のように混ざり合い、変化しながら時代に順応して行く。

そんな共生の姿に思いを馳せるのも楽しい。

さて、五月病と言う言葉は今もあるのかしら。

コスパ、タイパを重んじる昨今、「石の上にも半年」らしい。

まずはひと月、お疲れ様。

（も）